

Institute for Language Education
Aichi University, Nagoya

Goken News

No. 4 January 2001



ドイツの古い街道沿いには、リンゴや洋ナシの並木をよく見かける。秋、たわわに実った果実は、その昔街道を行き交った旅人達の空腹を満たしたと聞く。緑は流れ、アットバーン沿いの風景の移れば、草で覆い掛ける国々の旅人達にクリーンエネルギーを与えている。
(ゲーンヴァン沿いの風力発電機)

CONTENTS

◆特集 アメリカ合衆国

- | | |
|---|------------------------------------|
| -言葉から探る文化と社会
(平井 秀和).....2 | - "U-571" in China
(藤森 猛).....8 |
| -「フルハウス」と163島のアメリカTV番組
(長峯 信彦・小坂 敦子).....3 | -10年目のドイツ
(岡乃 由紀子).....10 |
| -「コム」は「COM・EDY」の「コム」
(片岡 邦好).....5 | -英国の地名(2)
(安藤 聡).....11 |
| -ミズーリー州ケイブ・ジラダーに滞在して
(末平 崑).....7 | |

特集 アメリカ合衆国

言葉から探る文化と社会

平井 秀和

ナイフ を辞書で引いてみると、西洋風の小刀、などとなっているけれど、このような説明は、明治や大正の頃ならいざ知らず、日本人の生活の中に溶けこんでいる現代では、もう不要な説明となっている。アメリカの辞書では 台所用品となっているナイフも、イギリスの辞書では、武器としても という説明が加えられている。イギリスでは、ナイフまで武器とみなすほど、まだ、安全な社会であることを示していると言える。小・中学校でも、休み時間にgunによる殺人が頻発するアメリカでは、ナイフまで武器として、辞書に記述する意識も余裕もないのだろう。

こういう調べ方をしていくと、辞書には、単に、引くだけではなく、読む面白さもある。

イギリス人の観るアメリカらしさとして、Oxford Guide to British and American Culture (1999:p.98)では、次の4つを挙げている。

power in international politics [世界の警察官・アメリカも、湾岸戦争などで、外国からの資金援助なしには戦えなくなっているところを見ると、そのpowerも、相対的に低下してきているのは明らか]

Hollywood [trashyでcommercial culture のシンボルとしての町・Tinseltown]

money [Money matters more than anything else to Americans;brash displays of wealth]

violence [The US is a dangerous place where you cannot walk in the streets or subways without fear or being attacked.学校へケイタイだけではなくケンジュウまで持ってくるアメリカ；警官が夜間でもケンジュウなしでパトロールできるイギリス]

それにしても、戦後の日本は、アメリカをモデルに努力してきた結果、最近の日本は を除いて、見事にアメリカに追いつき、あるいは追い越してしまった感がある。それは、ニュースで毎日のように報じられている。

また、アメリカ人を can easily become excited and rudeでhave no culture だとしている。[rudeやcultureについての英米人のものの観方の違いは、英・米の辞書の説明の中に読みとることができる。]

しかし、アメリカ人のfriendlyで、welcomingで、hard-workingで、生活をエンジョイし、social classもなく、何事にもopenな態度、などについてはイギリス人も評価する。

一方、アメリカ人は、イギリス人をどう観ているだろうか。ジェームス・ボンド、アガサ・クリステイー、くまのプーさん、霧[最近では、無煙炭や電気の使用でほとんどみられなくなった]、山高帽[も、少なくなっている]、queue、fish and chipsそして紅茶...

イギリス人のpoliteでproper[この言葉の意味はなかなか掴みにくい。よく英英辞典で調べてほしい。]な態度には尊敬すらしている。またplease, thank you(very much),excuse me,lovely,holidayなどの中にイギリス人らしさがある、とも言う。snobbishで stiff upper lip な性格のため、かなり重大なことをでも'That's no problem'と言うunderstantementには、アメリカ人も、なかなかついていけないようである。食事のまずさとdullでrainyなイギリスの天候には、不満が多い。それでも、アメリカ人はイギリスを自分たちの故郷だと考えている。

会に途中で中座することをFrench leave [フランス人流の去り方]と言うが、フランス人は、こ

れをfiler à l'anglaise [= stip away after the English fashion]とやりかえす。Brewerによると文無しのことを、フランス語では'je suis Anglè'〔私はイギリス人だ〕と言う、とある。こういうのをXenophobiaというけれど、これは、イギリス国内でも見られることであって、スコットランド嫌いでは有名なサミュエル・ジョンソン(1709-84)は、自分の編集した辞書の中で、oatsを「イングランドでは普通ウマに食わせるが、スコットランドでは、人間が主食とする。」と書いた。書かれたスコットランド人は、怒ることもなく「その通り。だから、イングランドではサラブレッドが生まれるが、スコットランドでは、すばらしい人物が輩出する。」と応じた、という。こういう英国的笑い〔イングリッシュ・ヒューマール〕で応じるゆとりは、生真面目な日本人では、おそらく通用しないだろう。

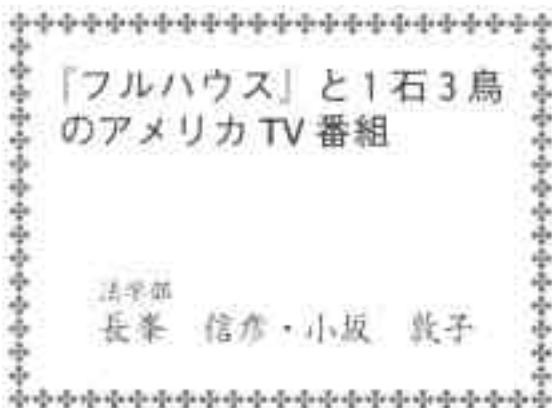
最近、『アメリカ人のまっかなホント』(第1巻)というシリーズ(現在、第24巻まで)が出た。『地球の歩き方シリーズ』が、実用的・観光旅行者向きであるのに対して、『まっかなホントシリーズ』は、国際化・情報化の激しい現代にあって、多様な世界を観る目を、主に、ことばを通じて養ってくれる大学生向き教養的啓蒙書で、楽しい読み物となっている。

最初の作品から実に10年近くも続いていて、その間俳優も声優も(あの『大草原の小さな家』のように)ほとんど変更なしという人気ロングランです。話はタナー家で母親が急死したところから始まります。残されたのは、潔癖過ぎるほどの綺麗好きで「趣味はお掃除」という父親ダニー、大人を手玉にとることを覚え始めた小学生の長女D.J.(ディー・ジェイ)、おしゃまでわがままな次女ステフ(5歳くらい)、そしてまた赤ちゃんの三友ミシェル。そこへ育児手伝いとして二人の男性が家族に加わります。ダニーの親友でコメディアン志望のジョウイと、亡き母の弟でちょっとカッコいいロックスターのジェスイ(主人公)。この3人の男性が3姉妹を養育しながら展開するドタバタが、実に楽しく、ジョーク満載で描かれます。

ある日父ダニーがTVリポーターとして晴れ舞台に立つことに。D.J.とステフはお祝いを贈ります。D.J.からはネクタイ。さてステフからは??かわいらしい手作りの品のようなのですが、誰にも何だかわからない。そこへ、製作者のステフがささず"Try on, Daddy!"(パパ、付けてみて!)ステフを傷つけない父、されど意味不明の品。まごまごしているところへD.J.が一言。「ネクタイ止めにしては結構イケてるでしょ?」長女が助け船を出してくれたことに感謝し、父は「おまえはいい子だ」とD.J.の肩に手をやります。その時の一言が、意外にもあの"God bless you." 畏まった時の表現と思いきや、こんな軽やかな使い方もあるんですね。印象的です。(最も初期の作品)

その後ジェスイはレベッカという女性と結婚し、彼女は妊娠します。レベッカは検査結果を告げる医者からの電話口で、ひどく興奮して「ウソでしょ!ウソでしょ!」("You're kidding! You're kidding!")と喜びを連発。何かと家族全員が心配して自分を凝視する気配に気づき、くるっと皆の方を向き、落ち着いてニヤッと一言。"He is kidding."("心配しないで。)冗談よ。)kiddingの用法が一発で飲み込めるような場面です。

現在、NHK-ETVで毎週金曜日18時25分から放送中。また、月~木曜日まで、深夜0時50分から



何とんでも『フルハウス』!

『フルハウス』というアメリカのホームドラマをご存じですか?結構面白いコメディーなんです。

再放送も楽しめます。今やD.J.も高校生、ステフは中学生に成長しました。いつも私が思うのは、日本語台本（翻訳）のすばらしさです。ある時タナー一家が旅行に出かけ、ホテルの主人（これがまたヘンなオッサン）が両手を広げて「おっしゃれーなアリババホテルへようこそ！」と大げさに出迎える場面がありました。VTRを巻きもどして「おっしゃれーな」の原語を聞き直すとfabulous。辞書だけ引いても出てきませんね、この訳は。発見です。またステフがムシャクシャした畔に発する決まり文句、"How rude!"は、日本語では何と「超ムカツク!」。これなど実に名訳です。3姉妹の生意気ぶり（特にステフとミシェル）と男性陣のおマヌケぶり（特にジェスイ）にはきっと笑わされますよ。(I'm not kidding).それでは皆さん、God bless you! (長峯信彦・憲法担当)

1石3鳥のアメリカTV番組

「それでは皆さん、God bless you!」なんて言われてしまうと、思わず『フルハウス』を見たくありませんか。思い立ったが吉日、ぜひ見始めましょう！現在『フルハウス』以外にも、いろいろな海外TV番組がNHK教育テレビ等で放送中です。嬉しいことに、その多くは、副音声機能付のTVでしたら、英語でも聞け、多少、単語がわからなくても、なんとなくストーリーがわかります。しかも、制作者には失礼ですが、途中から、無責任に視てもけっこう楽しめます。たとえば話題の番組『ER』では、さまざまな患者が毎回登場します。そのひとりひとりに短いドラマがあり、短い場面だけでも引き込まれ、どうなるのだろう、何を言ったのだろうと、思わず真剣に英語を聴いてしまいます。実は、英語で聴けば、海外TV番組は、英誌や文化の学習の面では、1石3鳥ぐらいの効果があります。

1羽めの鳥：英語で寝言

1番のメリットは、なんといってもスピードがあって、話がどんどん進んで行くので、当然、訳する暇もなく、聞いているうちに、英語で理解し、

英語で考えられるようになってくることです。『フルハウス』を視ていれば、「おっしゃれーな」の状況の時には自然と "Fabulous!" としいう単語が浮かぶでしょう。またイントネーションで、意味が変わってくるのも、少しずつわかって来ます。こうなると「寝言も英語」の日も近い。

2羽めの鳥：語いと話題が豊富な会話上手

アメリカTV番組をたくさん見ることは、語いも話題も豊富な会話上手になる近道です。語い力をつけたい人は、単語の重なりを狙って、決まった番組を続けて視るのも一つの方法。たとえば、ニュース番組なら、大きな事件は数日に渡って報道されますから、同じ単語も何回も登場し、身につつきやすいです。スポーツ中継等も単語の重なりが多いです。自分の興味ある分野・番組から始めるのがおススメ。会話の内容をぐっとアップしたい人には、NHKの衛星放送で火曜日から金曜日まで毎日14時から放送中の『ジム・レーラー』が、私の二重マル番組。大人の会話は話す内容次第。話題の豊富な会話上手をめざそう！（ただし、どの話題もそうですが、特に政治、宗教等のトピックは、T.P.O.をわきまえて、慎重に！）

3羽めの鳥：目が点!から広がる世界

3羽めの鳥は、違った価値観・文化に触れて、世界が広がること。アメリカのコメディやトークショーには、目が点になるような番組もけっこうありますが、これは、次の片岡先生の記事をご参考に。（ちなみに私のお気に入りには、『Late Night with David Letterman』。アメリカに行くことがあれば、一度、TVをつけてみてください。最初は意表をつかれた感じで、どう理解して良いのかよくわからないまま、でも、楽しく、思わず最後まで見てしまうことが多かったです）。目が点になった時は、「良い」「悪い」の判断は、とりあえず後回しにして、頭の中の「発見の引きだし」に置いておき、時々「どうしてだろう」と考えてみてください。目が点になった所から考え始めれば、新しい世界が広がります！

追記：

アメリカだけでなく、BBCニュース地、連合王

国の番組もいろいろ放映中です。こちらも、楽しんでください。またテレビで2ヶ国語放送を見るのは難しいという人には、図書館にも、英語が母国語の人向けに作成された字幕なしのビデオがいろいろあり、館内で見れますので、ぜひご利用ください。時間を作るのは楽ではありませんが、コツは、1にも2にも毎日続けること。最初はわからない所が多くても2か月続ければ、理解できる英語の量が、ぐっと増えているはずです。

(小坂敦子)



アメリカ特集の一端として、今回は特にTV番組に垣間見るアメリカ社会を紹介したいと思いません。長峯先生は日本で放映中のシットコム'sitcom'(=SITUATION COMEDY)の一つ、『フルハウス』をご紹介になりました。そこで、ここではまだ日本で見ることはできないが絶大な(?)人気を誇る3本の番組に触れてみたいと思います。ややきわどい話にならざるをえませんが、僕のせいではありません。あしからず。

まず最初は "Married...with Children" からいきましょう。(ちなみにこのタイトル、『既婚...こぶつき』って、なんか泣けません?(オレだけか。)) フランク・シナトラのほのぼのと始まる導入曲とは裏腹に、ことあるごとにアメリカ中流家庭の隠れた下劣さを笑いのめします。主人公のAl Bundyは女性専用の靴屋で働く中年男で、High School Footballでクォーター・バックとして一試合で4つのタッチ・ダウンを決めたことだけが人生の拠り所という男です。今ではサラリーマン人生に

疲れ、性欲有り余る妻 Peggy をもてあましているくせにnude barが人好き、とまあ日本のお父さんにもありがちな中年男性像として描かれます。開始当時は可愛かった二人の子供も番組後半(この番組もアメリカのsitcomによくある長寿番組で、10年以上続いて Fox13 というテレビ局の最長放映記録を持っています。)では20代、親が親ならというやつで異性と付き合うことしか頭にない。娘のKellyはcuteでsexy、でもbimboタイプの女の子(AIはよく「愛情」を込めて "pumpkin" と呼んでいた)。息子の Bud は軽薄短小を絵に描いたような憎めない奴で、ダッチワイフ相手に愛を語るのが大好きという情けない設定です。

この下品なキワモノさに一端ハマるとなかなか抜けられません。僕の友人にもたくさんファンがいました。私の妻も、初めて渡米してこの番組を見たときは "My jaw dropped!" だったと言ってますが、実は隠れファンです。でもパーティーあたりで "That's my favorite." なんて述べると、まあ男性は "Yeah, I like it, too." なんて陽気に同意する一方、実は目をそらすときの "Bad taste!" といわんばかりの薄笑いを見逃してはいけません。女性ならさしずめ "Male chauvinist pig!" くらいに思っているでしょう。軽々しく口にするのは危険です。しかし僕はここに悲哀を感じます。ここに描かれているのは裏返しの良識なんです(と言ったら言い過ぎか?)。最後に笑うのはたいていPeggyかKellyで、AlもBudもささやかな抵抗を試みるもののいつも女性には勝てません。Alのヒーロー、John Wayneのように現代のcow boyにはなれないんです。ここにあるのは落ちこぼれたマッチョ、踏み誤った人生、絶滅危機品種としての「強い男」、そして何よりも(アメリカに限りませんが)一極的価値観を見失ったポストモダンの状況です。

こういった一抹の悲哀を感じさせずに「今」を笑うのが "Saturday Night Live" です。タイトル通り土曜日の夜にライブで、ニューヨークから放送されています。これは由緒正しきコメディ番組です。ざっと思いつくところだけでも Chevy Chase, John Goodman (The Flintstones), Eddie

Murphy (Beverly Hills Cop), John Belushi (The Blues Brothers), Bill Murray, Dan Aykroyd (Ghostbusters), 近頃ではMike Myers (Austin Powers)などなど、第一線から二線級の娯楽映画・コメディを賑わすスター達がレギュラーを努めてきました。それだけでなく、そのときそのときの売れ筋・人気者をゲストに呼び、一緒になっておバカをするというサービス精神がすごい。Monica Luwinskyが実はBill ClintonとSaddam Husseinの二股をかけていたなんていう設定は序の口で(もちろん事実無根です)、例えばニューヨーク市を浄化し再生させたとの呼び声の高いジュリアーニ市長を招いて、悪名高きNY市のタクシー運転手の役をやらせて市長(つまり自分)の悪態をつかせたり、中野翠に言わせると世界一ランニング姿が似合うと言うPatrick Swayzeを男性ホストに仕立てて踊りを競わせるとか、まあちょっと下品だけど見てみたいと言う庶民の欲求に忠実なんです。出演者もみんな喜んでやるんです、これが。石原都知事にも「笑う犬の冒険」あたりでなんかやってもらいたいものです。

僕が個人的に関心があるのが、いわゆるethnic slursとかracial jokesを扱ったものです。これはかなりきわどい。ちょっと間違えると人権団体から苦情が来そうな内容もあります。平和なところでは、日本のクイズ番組を題材にしたスキットで、日本人に扮したレギュラーやゲストが問題を間違えるたびに指を詰めたり切腹したりと、まあよくやるわというくらいの固定観念でもって笑わせます。まさか真剣に見ている人はいないと思いますが、アメリカの片田舎では日本は中国の一部だとか大陸と地続きだとか思っている人がいるようなので、笑いも半減です。(事実、日本人がアメリカを知るほどアメリカ人は日本を知りません。)なかにはある民族の行動パターンを露骨に茶化したりするものもあって、ある意味でけっこうスリリングだったりします。

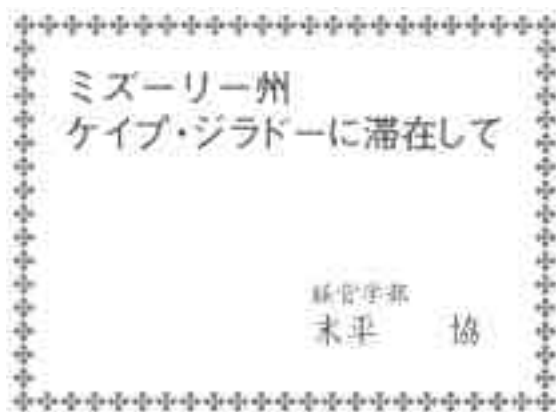
でもこれはある面で健全なのかもしれません。多民族であふれ、民族的対立が日常茶飯事になってしまったアメリカでは、何がしかの民族的な(固

定)観念を払拭するのは非常に困難です。腹の中に溜めて、あらぬステレオタイプを助長するよりは、いっそ全てを吐き出してお互いを笑い飛ばしたほうが楽なのかもしれません。いわば社会的偏見のガス抜き弁とでも言ったらいいでしょうか。事実、いつも特定の人種・民族だけを槍玉に挙げることはありません。この是非はともかく、現実の問題を考える機会としてこれ以上のものはそれほど見当たらないでしょう。

紙面も少なくなってきたので、最後に強烈なのを一つ。これははじめて見た時はさすがに目点になりました。普通トークショーと言えば、"Oprah"とか"David Letterman Show"なんかが有名で人気がありますが、この世界のダースペーダーはなんとといっても"Jerry Springer"でしょう。(これらはどれも司会者の名前が番組名になっています。)もう出演者がとんでもない。Teenage motherの姉妹そろってその子供の父親が実の父だとか、10歳からprostituteとして搾取され、そそのかしていたのが母親だとか、美しき良きアメリカなんてどこ吹く風。もうこの世の終わりのような人たちが我が物顔でわめき散らして、乱闘騒ぎは当たり前と言う番組。(さすがに深夜にしかやっていません。)はじめは「本当」の乱闘だったようですが、あまりにも日常的に起こるので疑問の声があがりました。幸か不幸かこの番組はヤラセだとわかり、この点日本の某番組を思い起こさせます。この番組のパロディーまで出て来る始末です。それにしても、人間のあり方はこうも多様かと考えさせられます。

しかしこれはある意味必然かもしれません。TV番組の多様性は社会構造の反映とも取れるからです。実際はその社会階層、宗教、価値観などの多様性に見合った番組が存在するはずですが、この点で、現在私たちが日本で見られるアメリカの番組は偏っています。Sitcomの出演者はほとんどが中流以上、家族愛と自由に満ちた理想の国の体現者。でもTV番組同様、買い物に行けば社会階層に応じたスーパーマーケットがあり、それぞれの収入やステータスに応じた生活をしています。その点

日本ではいいもの悪いものの差が少ない代わりに選択の幅が狭い。(最近は「差別化」のあおりでこの傾向は薄れ始めていますが。)しかし...こんなことを考え出すときりがありません。もうやめます。皆さんもアメリカに行く機会があったら、なかなか見えない面をあえて見るように心がけてください。何についてもいえることですが、既に出来上がったイメージが真実とは限りません。唐突ですがこれにて。



SEMO 大学にはもうこれまでに3度行ったことになる。初めは94年であり、その後99年、2000年である。これらの滞在のうち今年夏の間は3週間ほど学生たちと滞在することができたので、これまで訪れることのなかったミズーリー州とその近辺の幾つかの町や村を見ることができた。やはり、夏のあいだは良い天気が続くので私たちの行動半径が広がり、名古屋市におけるよりも高い気温にもかかわらず、あちこちを当地にいるあいだに見ておいてやろうとする意欲がかき立てられた。

ケイブ・ジラドーは、人口6、7万人の小さな市で、学生数が一万人ほどの大学が市の中心部分を作っている学園都市であるといつてよい。ただ、日本の同じ程度の人口の都市に比べれば、やはり市域は広くてずっとゆったりした町並である。町の中心部から車で5分も外に出れば、森や林が道路の両側に広がり、目にはいる建物の間隔はまるで北海道の田舎のようである。しかし、このように広大な空き地がふんだんにあることと、自動車

の普及が、町の中心部の過疎化と、郊外での大きな商業地区の誕生をどんどん押し進めていく。ケイブ・ジラドーのかつてのダウントンは平日には買い物客の姿はまばらで、19世紀に建てられた風格のあるロイヤルニューオルリンズや、南北戦争中に一時北軍のグラント將軍の司令部として使用されたポート・ケイブ・ジラドーの煉瓦作りの建物なども、今ではケイブの「歴史的な下町」と名づけられて、その他の多くのしゃれた造りの建物と一緒に半ば観光客にながしかの郷愁を感じさせる場所として存在しているに過ぎないようにみえる。人々は、何処の国でも今ではそうであるように、より便利なところに住み、効率よく毎日を送ることを望んでいるかのようにみえる。19世紀まではミシシッピー川が北部と南部を繋ぎ、産業や観光業でも中心的な役割をになっていたけれども、今世紀の半ば以後は、数隻の観光船がオハイオ州のシンシナティーからニューオルリンズまで、19世紀をなつかしむ観光客を乗せて回遊しているにすぎない。かつて、河川が商品輸送の役割を担っていた時代は今では遠い過去のものとなり、河川は鉄道にとって変わられ、更に車と飛行機がこの広大なアメリカ合衆国の陸地をめぐっている。

しかしながら、こうして、ケイブの町が過去の面影を失い、次第に近代的な町へと衣替えをしていく反面、現代の喧噪と能率化から逃れ、かつての静かで手作りの、より人間の匂いのする過去の遺産を愛し、大事に後世に残しておきたいと考えている人々が沢山いるのも事実だ。その一つが、セントルイスとケイブのほぼ中間に位置するセント・ジェネビーブの町であり、そこに今も多数残っている18世紀のフレンチ・コロニアル造りの家々は、現在も個人が使用したり、既に記念的な建物として大切に保存されたりしている。多くの建物が18世紀、あるいは、19世紀初頭の建物であり、Sさんは1795年の家を手に入れて少しずつ補修工事をしながら住んでいる。このような古い建造物を21世紀に残していくことにはお金もかかり大変なことと思われるけれども、州と町が古い家々保存のために積極的な姿勢をとり、基金を

募ったり、保存協会を組織したりして家主に建物保存のための金銭的援助を与えたりしている。2000年の8月現在で30軒が‘歴史的遺産’として指定され、今後さらに古い建築物が遺産として保存されていくようである。Sさんもまた、自分の家屋が早く歴史的家屋に指定されるのを心待ちにしている。

これらの家屋が今も当地に多数存在しているのは、アメリカ政府による1803年のルイジアナ購入以前には、フランスがルイジアナ地方（現在のルイジアナ州よりもはるかに広大な地域）を所有していたからである。それ故、今もミズーリー州付近から南にかけてはフランスの影響が城塞やフレンチ・コロニアルスタイルとして残り、セント・ジェネビーブとミシシッピー川の対岸のランドルフ郡には、フレンチ・コロニアルスタイルの家屋としてはそのあたりで一番瀟洒なピエール・メナード・ホームがイリノイ州の歴史協会によって大切に保存されている。また、シャルトル城塞は18世紀当時のフランス軍の要塞としてアメリカ合衆国内で唯一完全な形で残っているもので、場内の博物館の資料により19世紀当時のルイジアナ地方でのフランスの影響力を推し量ることができる。このように、ケイブ・ジラドーから少し北に足をのばせば、18、19世紀の外国の歴史的遺産をあちこちに垣間見ることができるし、また、ケイブのすぐ郊外には、1838年から39年の冬にかけてオクラホマの居留地へと強制移動させられて、多くの命を落としたチェロキー・インディアンたちがたどらねばならなかったTrail of Tears（涙の道）がオクラホマ州に向かって通じている。

このような過去の歴史的遺産にたいして、あるものは‘負の遺産’として現在の良心的なアメリカ人たち心の痛みとして残り、彼らが私たち日本人が知る以上にこれらの問題に対してデリケートな反応をせざるをえないのが現状である。アメリカ合州国という、20世紀において様々な分野で世界の最先端を走っているかにみえる国が、こうして、中央政府から遠い小さな町を中心にし、その周辺で生起してきた歴史・物事を考えてみれば、

より新たに21世紀に向かう力と、過去の歴史を見つめて、アメリカをこれまで作りあげてきたものを大切にしなければという謙虚な意識の、二種類のものぐつかりあっていることが分かる。

より大きな資本を持つ企業による大規模なショッピング・センターの開発、また、自動車、電話、テレビ、コンピューターなどによる、より便利で快適な生活の追求、このような生活を多くの人々はこれからもケイブ・ジラドーの町で追い求めるのかもしれない。しかし、そのような将来に小さな異議を唱えるかのように、人の誇りや独自性こそが大切だと考え、人間としての生き甲斐とは何なのかを、草の根を根気よく捜す人のように、個人のレベルで手探りしながら地道に生きている人々をこの地に見いだしうるのは素晴らしいことだと言わねばならない。



2000年ハリウッド映画『U-571』（原題U-571）、『グラディエーター』（GLADIATOR）、『ダイナソー』（DINOSAUR）の3作を8月の炎天下の上海で観ることになった。アメリカにおいては、メモリアル・デー（Memorial Day）を挟んだ5月～6月における映画収益ランキングがそのまま年間の映画興行成績となる傾向が続いているといわれ、上記の3作は、いずれもアメリカの2000年度映画ランキングのベスト5に名を連ねる話題作である。

東アジアにおけるハリウッド映画公開

中国、韓国などの国々における映画上映は、わが国同様にアメリカ映画がマーケットを席卷して

いる。中国においては、72年の米中共同声明以降、アメリカ映画の輸入がはじまったが、いわゆるスクリーン・クォータ制の存在により、映画上映における中国国産映画とアメリカなどの外国映画の上映時間比率が定められ、80年代、アメリカ映画の年間輸入本数は数本であった。しかし、80年代後半以降、アメリカの娯楽映画は中国の人々に広く受け入れられるようになり、アメリカ映画の輸入本数は急速に増加している。99年11月、中国のWTO加盟を巡る米中閣僚級交渉の中で、中国は年間40本までのアメリカ映画の輸入を認め、3年以内には50本までに引き上げることで合意に達した。

中国においては、ロードショーの初日にどれだけの"黄牛"（中国語で"ダフ屋"）が現れるかを、その映画がヒットするか否かの1つのバロメーターとしており、最近ハリウッド映画の話題作公開の日に大量に出没している。今年の8月、上海市内で「グラディエーター」（中国タイトル：角闘士）、「ダイナソー」（恐竜）などを週末にかけて観ようと思って映画館にでかけると、はたして額面30元のチケット（約480円）を20～30枚くらい束ねた"黄牛"に声をかけられた。



ディズニー映画「ダイナソー」広告(上海市で、2000年8月)

一方韓国においては、87年の六・二九宣言以来、民主化の波が映画産業においても押し寄せ、それまでハリウッド映画の輸入本数は年間40本弱であったが、90年代以降は年間200本近くロードショー公開されるようになった。近年、アメリカ

のヒット作品の公開時には、1枚6000ウォン(約600円)の映画チケットが飛ぶように売れている。これに対して98年12月、ソウルのアメリカ大使館の前で、韓国の映画俳優たちがアメリカ映画の自由化に反対する抗議行動をとったことは記憶に新しい。

"U-571"

中国における外国映画の上映は、字幕スーパーではなく、中国語の吹き替えによって行われることが多い。映画『U-571』は、中国語の映画タイトルが原題の英語タイトルと同じであったが、自身は中国語による用語へ翻訳されていた。

映画のストーリーは、第二次大戦中、ベルリンのヒトラー（希特勒）の指示によるUボート（U型潜艇）に使われる暗号機（密碼機）を争奪しようとするアメリカ海軍の特殊任務部隊（特別行動小組）の物語である。主人公のAndrew Tyler（安德魯・泰勒）海軍大尉らの決死の行動は、上海の映画館の観衆にも共感を呼び、ラストのドイツの巡洋艦（徳軍巡洋艦）に魚雷が命中するシーンでは館内で拍手が起こった。第二次大戦中、いうまでもなく中国は連合軍の側にあっただけで、映画館の歓声は当然のことであるともいえる。

80年代後半、中国においてはいわゆる第五世代監督（第五代導演：Fifth Generation）の出現により、ニューウェーブと呼ばれる空前の中国国産映画ブームがおこり、『黄色い大地』（黄土地：YELLOW EARTH）や『赤いコーリャン』（紅高粱：RED SORGHUM)などのヒット作品が世界で放映された。また韓国においても90年代初頭に韓国国産映画ブームが起こり、『風の丘を越えて』（서편제：SOPYONJE)などの名作が、多くの国で放映された。しかしながら、90年代半ば以降、中国、韓国や日本の映画作品は、製作資金や技術的な問題から世界の映画観衆を魅了するような作品を生み出すことがむずかしくなっている。中国や韓国に旅行へ行き、当該国の新作映画を見ようとする時、一映画ファンとしては、中国や韓国の国産映画を上映している映画館へは行かずに、戦

争大作『U-571』やCGを駆使したデイズニー映画『ダイナソー』、古代ローマ帝国を描いた歴史スペクタクル『グラディエーター』といったアメリカ映画を上映している映画館の方へ足が向いてしまう。

現在、ハリウッド映画は、アメリカのロードショー期間から1～3ヶ月後に中国や韓国などの主要都市で公開され、半年～1年経ってから日本の各都市で公開が始まる。アメリカ国内において2000年上半期に上映された上記3作品について、日本国内では、『U-571』が2000年9月～11月公開、『ダイナソー』と『グラディエーター』が2001年春に公開される予定である。ハリウッド映画の話題作を身近な場所で早く見ようとするなら、当分の間は、お隣の韓国か中国・台湾・香港などへ行ってみることになる。それにしても、アメリカ映画を中国語、韓国語といったアジアの言語で楽しむ醍醐味もまた格別であるといえる。



アメリカ映画『U-571』『M:1・2』『グラディエーター』広告
(上海市で、2000年8月)



東西ドイツが再統合されて10年目にあたる今年の8月末、久し振りにゲッチンゲンを訪問した。ゲッチンゲンはフランクフルトとハノーバーの間に位置する静かな町である。古い歴史を誇るゲッチンゲン大学と、4ヶ所のマックス・プランク研究所（特にそのうち一ヶ所には、ノーベル賞受賞者が二人も所属している）以外には取りたてて挙げるべきものもないような小さな町である。ゲッチンゲン大学には有名な数学者や化学者が多数在籍していたが、その内“ガウス分布”で有名な数学者ガウスのおかげで、10マルク紙幣にはガウスの業績とゲッチンゲンの古い教会が絵柄として採用されている。10数年前の約2年間、私はマックス・プランク実験医学研究所の化学部門で客員研究員として過ごした。

その時の研究仲間であり、かつそれ以来の友人夫妻がハノーバー空港に出迎えてくれた。おりしもハノーバーでは、20世紀最後の万国博覧会が開催されていた。不人気で入場者数が低迷していると日本でも聞いていたが、それを裏付けるかのごとくハノーバー空港は万博会場最寄の空港にもかかわらず閑散としていた。

友人夫妻は、私と共に万博に行く計画を立てていた。彼らは研究者の常として好奇心旺盛な夫妻で万博には興味を持っていたが、あまりの不人気のため、日本からの友人を案内するといった大義名分でもないと出掛けられない雰囲気でもあったのだろうか。そんなわけで、ゲッチンゲンに滞在中の一日、友人夫妻と共に万博見学に出掛けたのである。

30年前の1970年、日本で開催された大阪万博は大盛況であった。国内経済は上昇傾向にあったが、海外旅行はまだ高価の花であった時代である。地図でしか知らない多くの国が一堂に会する万博は、当時の日本人にとって世界への憧れや明るい未来を具現化してくれる場であった。この時アメリカ館では、アポロ11号が月から持ち帰った「月の石」が人気を博し、多くの人々が炎天下行列を成し、2,3時間の入館待ち時間を耐えていた。

あれから30年の時が流れ、社会情勢、経済状態等、世界は大きく変化した。大多数の日本人は海外旅行を経験し、またインターネットの普及により居ながらにして世界中の情報を手に入れることができる現在、30年前と変わらない運営形態での万博が、もはや人々の興味を引かないことに多くの説明は不要であろう。このような状況は当然予測されていたことであり、そのためかアメリカは賢明にも(?)不参加、また日本を始め出展しているどの国も極力押えた予算のなかで運営している状況がありありと見て取れた。

さらに閉幕までにはまだ二ヶ月を残すにもかかわらず、万博開催の赤字をニーダーサクセン州(ハノーバーが属する州)のみで背負うには巨額であると、ドイツ連邦すべての州で協力して解消する提案が示された。これには当然のごとく反対の声があがり、特にバイエルン州は声高に不快の念を表明していた。

短い見学ではあったがいずれの参加国においても、今回のテーマである「環境・未来」に対する明確な提案を出しきれず、考えあぐねている様子が明白な出展内容を見ていると、無駄な経済行為としか思えない万博は、20世紀と共に幕を閉じたほうがよさそうだ、との感想を抱いた。2005年の愛知万博も、開催するのであれば根底の発想から考え直す必要があるだろう。

今なぜ、ドイツは万博開催に名乗りをあげたのであろうか? ハノーバー万博への私なりの感想に対する友人の応答は、東西統一後の何となくちぐはぐなドイツの状況を嘆く独白であった。彼曰く、「一体ドイツは何をしているのだろうか?」。そして

さらに友人が話してくれたドイツの不可解な政策とは、エネルギーとITに関するものであった。

2025年までに国内の原子力発電は全廃し、クリーンエネルギーに変換することをつい最近表明したドイツでは、クリーンエネルギーとして風力発電を推進しているようである。アウトバーンを車で走っていると、そこそこに風力発電機が2基、3基と並び、プロペラがぐるぐると回転している風景は最早日常化している。そのドイツが、次世代のクリーンエネルギー源としてさらに採用したものに泥炭がある。国内には大規模な泥炭の鉱床が存在する。しかし鉱床の上には小さな町があるため、まずはその町をそっくりそのまま移住させ、その後泥炭の採掘を開始することにした。そして町の移住は既に始まっているとのことである。質の悪い泥炭をエネルギー源にするとは、どこがクリーンなのだろうか。大気汚染を解消できるような燃焼炉の開発で対処するのであろうが、それにしても環境先進国として名高いドイツの選択であろうか、とドイツ人自身にも不可解なようである。

またIT革命が叫ばれている昨今、ドイツではコンピューター教育の遅れが目立っている。特に即戦力として活躍できる人材が不足しているため苦肉の策として、インドから2万人のコンピューター技術者の移住を受け入れる決定をした。8月には第一陣として20数名のインド人技術者にビザが発給されたとのことである。「ドイツはこの10年間、一体何をしてきたんだろう」、友人の嘆きは一



夜空に浮かび上がる日本館
(ハノーバー万博にて、2000年8月)

層深くなるのであった。

EUによる通貨統合はドイツに対する外圧的戦後処理ともいわれている。確かに通貨統合後、マルクは弱体化した。しかし物価は安定し、少なくともゲッチンゲンでは変らない生活が人々を取り巻いている。過去への嘆きよりも、「ドイツはこれから何をやるのだろう」と、次の世紀への期待も心をよぎるようなドイツの底力を感じるの、私が日本人だからであろうか。



今回はスコットランドとウェイルズ編をお送りしよう。スコットランド語（ゲール語の一種）は現在では特にハイランド地方の一部と孤島にわずかに生き残っている程度であるが、地名の中にはいくらかでもその痕跡を辿ることができる。ウェイルズでは道路標識が二カ国語（英語とウェイルズ語）であり、イングランドとの国境には'Welcome to Wales /Croeso i Gymru' と併記された看板が必ずある。母国語としてのウェイルズ語話者も北部を中心に少なからず存在し、中には英語を全く解さない者もいて、我々日本人にとっては信じがたいことだが「英語をまったく話せない英国人」というのも確かに存在するのだ。アングロ・サクソン人の国であるイングランドに対してスコットランドとウェイルズ、そして隣の島アイルランドはケルト人の国であり、それぞれにイングランドとはまったく異なった文化を持つ。

小学校時代音楽の時間に「ロッホ・ローモンド」というスコットランド民謡を習った記憶がある人

も多かるう。この歌はイングランドで投獄されたスコットランド人兵士が処刑される前夜に故郷の湖を思って書いたものと言われている。湖の名前は「ロウモンド」で、「ロッホ」は「湖」を意味するスコットランド語である。従って有名な「ネス湖」は現地では「ロッホ・ネス」と呼ばれる。「ロッホ」は'loch'と綴り、「ホ」は英語にはない子音であるため（発音記号では'x'で表される）、イングランド人やアメリカ人などは通常「ロック」と発音する。スコットランドは湖が多い国なので、この単語はロッホインヴァー、ロッホナガー、ピトロッホリーなど多くの地名に見られる。

ロッホインヴァーの「インヴァー」は「河口」を意味するスコットランド語である。イングランドで言うポーツマス、プリマスの「マス」である。但しインヴァーの場合は語頭に来到ることが多く、ネス川の河口の街はインヴァーネス、エスク川の河口にはインヴァーレスクがある。アバディーンの「アバ」もまた河口を意味し、この街は実際ディー川が北海に注ぐ河口に位置しているが、実際地名の語源となったのはこの川ではなく近くを流れるドン川である。何故なら旧市街である「オールド・アバディーン」はドン川の河口に近いところにある。グレンフィナン、グレンリー、グレンコウなどの「グレン」は「渓谷」を意味し、この 'glen' は 'loch' とともにスコットランド方言として英語の中に生き残っている。「グレン」よりも広い「渓谷」を意味する「ストラス」(strath)も方言として生き残っているばかりでなくストラスヘイヴン、ストラスクライドなど多くの地名を形成している。

ベン・モア、ベン・ネヴィスなどの「ベン」は「山」「頂上」を意味する。ベン・ネヴィスはスコットランドで一番高い山であり、ブリテン島全体でもこれが最大の標高を誇ることになっているが、それでもわずか1344mだ。一方「ダン」は「要塞」を表し、ダンディーは「デイグ(人名)の砦」、ダンバーは「丘の上の砦」、ダンケルドは「カレドニア人の要塞」を意味する。カレドニアは言うまでもなくスコットランドの古名である。「教会」を表わす英語 'church' はスコットランド方言では

'kirk'であり、カーウォール、カータカドブライト、セルカークなどはすべて、教会にちなんでつけられた地名である。カークビー、カークリーズなど、「カーク」がつく地名はイングランド北部にもよくある。

「ウェイルズ」は「外国人」を意味する古英語を語源とし、勿論アングロ・サクソン人が付けた名前である。ウェイルズにも英語とは明らかに違った音や綴りを含む独特の地名が多く、スコットランドのそれよりも難解である。カナーク、カーフィリー、カイアゴアリーなどの「カー」「カイア」(caer)はスコットランドの「ダン」と同様「要塞」を意味する。カナークは「アーフォン(アングルジー島)に面した砦」の意であり、英国皇太子「プリンス・オヴ・ウェイルズ」の戴冠式はここで行なわれる。ウェイルズの首都カーディフは英語では'Cardiff'だがウェイルズ語では'Caerdydd'と綴り、意味は「タフ川に面した要塞」である。

ブレインセッハイ、ブレイン・ア・クーム、ブレイン・サンヴィなどの「ブレイン」(blaen)は水源もしくは高地を表し、ブレイナヴォンは「川の源流」である。ウェイルズ語で「川」は'avon'であり、イングランドにあるエイヴォンという川もウェイルズ語に由来する。一方プリンマウア、プリンパデュー、プリンハヴリッドなどの「プリン」(bryn)は「丘」を意味する。「クーム」(cwm)はクーム・アヴォン、クームグラッホ、クームディなどの例に見られるが、これはスコットランドの「グレン」と同様「渓谷」を意味する。「クーム」の場合特に「狭い渓谷」であり、イングランド南西部にもババクーム、イルファクーム、カースル・クームなどこれがつく地名は多いが、英語では'combe'と綴る。

スコットランドのアバディーンと同様、「河口」を意味する「アバー」がつく地名はウェイルズにも多い。「イストゥイス川の河口」にある海辺の観光地アバリストゥイス、「ダヴィ川の河口」のアバーダヴィ、イングランドのポーツマスと同様「河口の港」の名を持つ漁村アバーホースなどがそれ

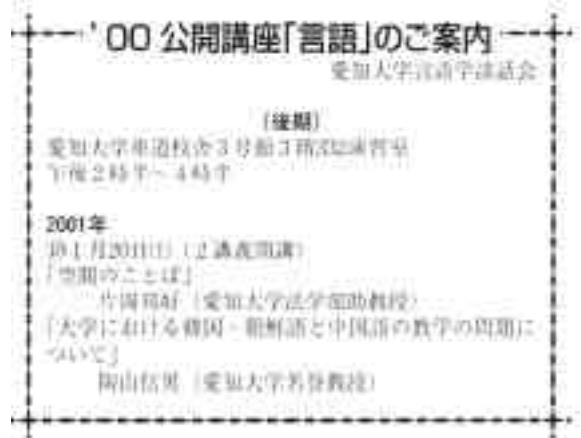
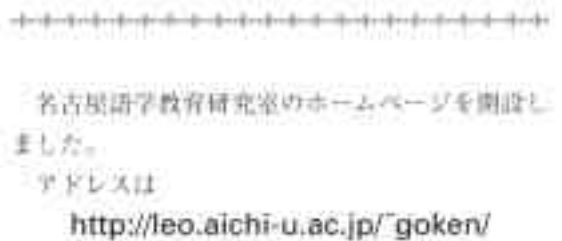
である。英語で「ピン」とか「ペン」で始まる準語は「先が尖ったもの」を表すことが多いが、地名で「ペン」がつくのはたいてい半島の先端にある町や村である。港町ペンブルクは文字通り「土地の先端」にあり、ペンマインマウアは「巨大な岩の先端」から来ている。イングランドの西南端コーンウォール(この「ウォール」は元来「ウェイルズ」と同じ語である。「コーン」は「ツノの先端」であり、つまり「コーンウォール」は「(半島の)先端の外国人の土地」の意である)の半島にある街は「聖なる岬」ペンザンスだ。「ザンス」は英語の「セント」に相当する。コーンウォールは現在ではイングランドの一部であるが、元々はウェイルズと同様ケルト人の国である。ここには半島がいくつもあるので、「ペン」で始まる地名も非常に多い。

さて、最もウェイルズ語らしいものといえば、やはり「教会」を表わす「サン」がつく地名であろう。これは'llan'と綴り、'll'は英語の子音'l'を無声音(摩擦音?)にしたような音である。筆者は音声学の専門家ではないので、この説明は必ずしも科学的に正確な説明とは言えない。英語音声学の専門家で釣りが趣味である故にウェイルズを頻繁に訪れている友人は、むしろ「シャン」と表記した方が近いかも知れないと言う。この'll'の子音も勿論英語には存在しないので、非ウェイルズ語話者は「スラン」[slan]という発音で代用する。これがつく地名にはサンベリス、サンゴセン、サンダドゥノウ(シャンベリス、シャンゴシェン、シャンダドゥノウ)などがある。サンベリスは6世紀にローマから来た伝道師セント・ペリスにちなむと言われ、サンゴセンは7世紀にローマ軍の軍人として渡ってきたセント・コルン、サンダドゥノウはおそらく6世紀頃この地で活躍したセント・タドノウに由来する。しかし何と云っても、ウェイルズの「サン」で始まる地名の中で最も有名なものと言えば、メナイ橋を渡ってアングルシー島に入って西に折れて10マイルほどのところにあるサンヴァイアブスグウィンギスゴウゲラッホワンドロウブスサンダシリオウゴウゴウッホ

(Llanfairpwllgwyngyllgogerychwyrndrobwllllan-dysiliogogogoch)という58文字の長い名前を持つ村であろう。ここには鉄道の駅があり、英国の寒村の駅の例に漏れず無人駅であるが、駅近くのスーパーで土産物として長い長い入場券を売っている。この名前は二つの村が合併したときにいずれの名前を取るかでどちらも譲らず、結局両方の村名を強引につなげてしまったという経緯がある。合併する前から十分に長かったという気がしないでもないが、前半の「サンヴァイアプスグウィンギスゴウゲラッポワードロウプス」の部分が「渦巻く急流の近くの白いハシバミの池の近くの聖マリア教会」、後半「サンダシリオウゴウゴウゴウッホ」が「洞窟の近くの聖ティシリオ教会」を意味する。しかしこれだけ長い名前だと当然日常生活に支障を来たすので、通常は'Llanfair PG'と表記し、「サンヴァイア・ピー・ジー」(非ウェイルズ語話者は「スランフェア・ピー・ジー」)と発音することになっている。

ところで今回の『語研ニュース』はアメリカ特集である。ついでに米国で一番長い地名についても触れておこう。それはマサチューセッツ州ウェブスター近くのチャゴウガゴグマンチョーガゴグチョーブナグンガモーグ(Chargoggagoggman-

chaugagoggchaubunagungamaug)という44文字からなる湖の名前であり、原義はインディアン語で「君は向こう側で魚を釣れ。僕はこちら側で魚を釣る。真ん中の魚は誰のものでもない。」ということらしい。



〔編集後記〕

人類が月に到達してから30年が経った。この快挙は驚きだったが、今やナノテクノロジーの時代が迫っている。人の遺伝子がすべて解読された。爪の大きさの面積にトランジスタが4億個も集積されたMPUが2004年には量産される、というニュースが続き、指先を見つめてどんな仕事みがあろうと想像してみるが、ここはもう賞賛する以外にしようがない。

誰もがインターネットができるようになり、地球は小さくなって、情報リテラシーとともに語学の重要性はますます高まっている。もはや特に十分に英語を知らないでは生きられなくなっている。社会の要請は急である。入社条件にTOEICの最低点を設定し始めている。ある会社では社員全員に受験を強制し、その結果平均点は200点上昇、700点であると報じられた。

習得の方法も多様化している。衛星が地球の周りを飛び回る時代、受験で音を頼りにしていた方法からいまやVISUALをたよりに頼りどこであろうと修得は可能である。CS、BS、地上放送と、やる気がありさえすれば、独学で何か国語も学び取ることは容易である。

そうした状況の中、今回、英語担当の先生方がおすすめ番組を解説付きでご紹介してくださった。楽しみながら上達すること請け合いだ。早速試してみてもうどうだろうか。鉄は熱いうちに、頭は若いうちに！
(S.K.)